

法政大学におけるFD活動

会 沢 信 彦

(教育学部准教授)

1 法政大学の概要

法政大学の概要について、大学ホームページを基に述べる。

法政大学の設立は、1880（明治13）年に設立された東京法学社にさかのぼる。その後、1920（大正9）年に大学令により初めて私立大学の設置が許可されて法政大学となり、法学部、経済学部を開設した。

現在では、12学部、通信教育部、大学院13研究科・1インスティテュート、専門職大学院2研究科を擁し、学生数約28,800名を数える、国内有数の総合私立大学である。

「自由と進歩」を建学の精神とし、「社会の進歩を担う積極的な精神力を持つ個人、つまりは『自立型人材』を育成すること」をその使命としている。そして、「学生一人一人が自らにふさわしいキャリア形成を行っていけるよう、そのプロセスを全面的に後押しし、その結果として、自立的でリーダーシップを持ち、社会の進歩に資する人材を世に送り出すこと」が教育理念・目的であるとされている。

2 FDの経緯

法政大学におけるFDの経緯について、大沢（2007）をもとに述べる。

（1）学部ごとの授業評価アンケート

法政大学における全学的なFDの取り組みは、2004年度から実施された「学生による授業評価アンケート」から始まった。しかし、それ以前から、一部の学部では授業評価アンケートが実施されていた。

まず、経済学部では、1986年以前から、教務委員会が主体となって授業評価アンケートが行われていた。さらに、新設の5学部（1999年設置の国際文化学部と人間環境学部、2000年設置の現代福祉学部と情報科学部、2003年設置のキャリアデザイン学部）においても、それぞれ授業評価アンケートが行われていた。

（2）全学FD推進委員会の設置

2003年11月、学務担当理事の発議により、教員27名、事務職員5名からなる、法政大学全学FD推進委員会が設置された。しかし、2つの理由により、この委員会は十

分に機能しなかったという。

第1の理由は、委員会構成の問題である。教員メンバーの半数が各学部や大学院研究科の主任クラスであったが、これらの委員は他の仕事でも忙殺されており、委員としての任務を十分に遂行できなかった。

第2の理由は、FDの概念が学内に定着していなかったことである。そのため、授業評価アンケートが人事考課につながることを危惧した教員や学部も存在した。

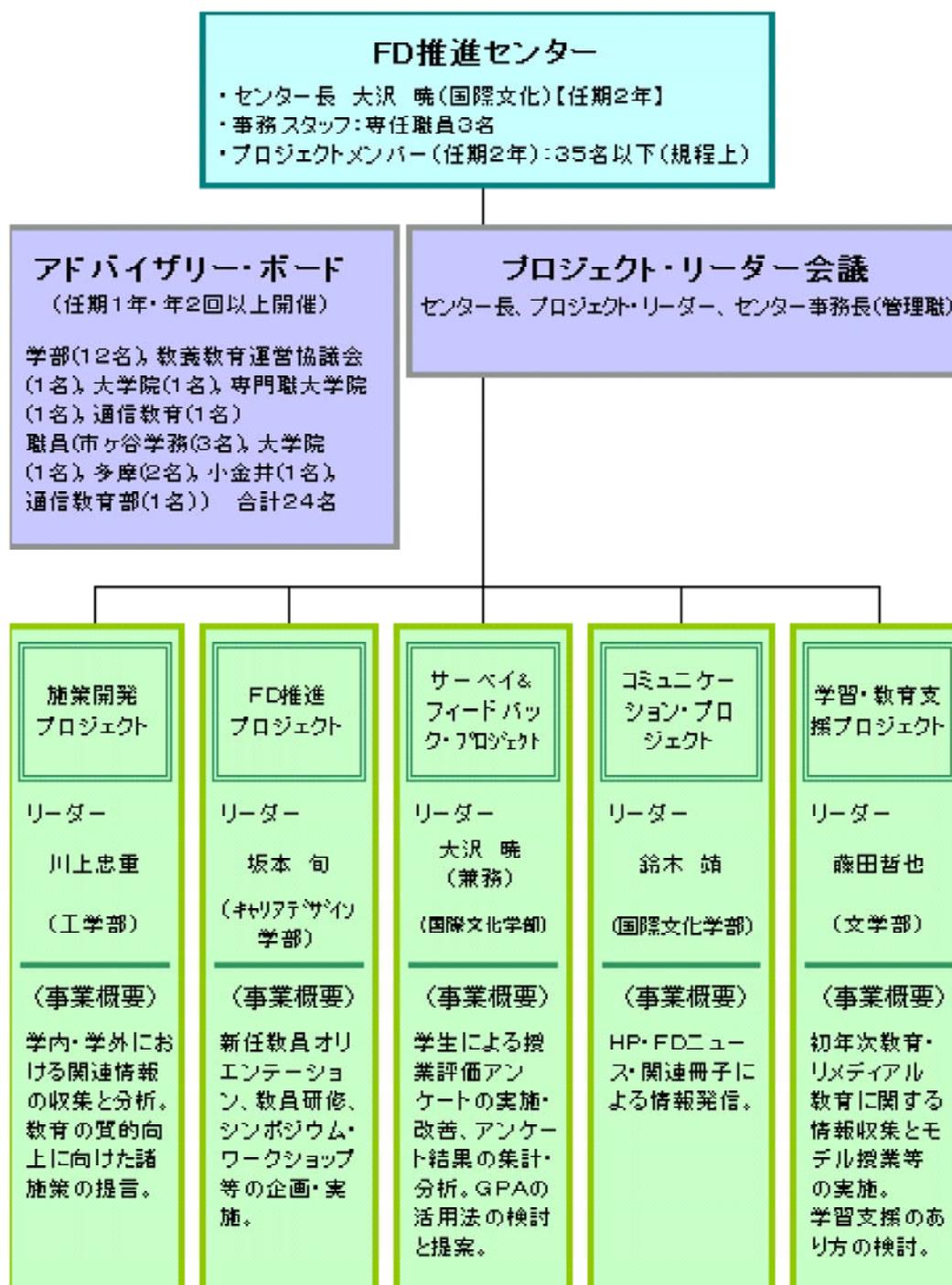


図1 FD推進センターの組織

(3) FD推進センターの設置

全学FD推進委員会の経験を生かしつつも上記の反省を踏まえ、2005年4月に法政大学FD推進センターが発足した。その際、実際に全学FD推進委員会時代に働いた教員をセンター長およびプロジェクト（後述）リーダーとした。さらに、FDに積極的な教職員を“1本釣り”することで、機動力のある組織を目指した。

なお、FD推進センターの組織は図1の通りである。

その運営は、センター長、各プロジェクト（後述）・リーダー、センター事務長と職員からなるプロジェクト・リーダー会議において決定される。一方、具体的な活動は各プロジェクト単位で行われる。

FD推進センターでは、当初、施策開発プロジェクト、FD推進プロジェクト、サーベイ&フィードバック・プロジェクト、コミュニケーション・プロジェクトの4つのプロジェクトが立ち上げられた。2007年4月からは学習・教育支援プロジェクトを加え、5プロジェクト体制となった。各プロジェクトは、リーダー1名、教員2、3名、事務職員1名（いずれも兼務）からなる。

アドバイザー・ボードは、センターと学部や大学院研究科等の各教学単位とを結ぶパイプ役の役割を果たす。

なお、センター事務室には3名の専任職員が配置されている。

3 FD活動

(1) 学生による授業評価アンケート

前述のように、法政大学では2004年度前期から、全学で「学生による授業評価アンケート」を行っている。アンケートは5段階評価および自由記述の20問から成っており、項目は毎年見直されている。学部、大学院とも、問1～問10が共通、問11～問20が学部、研究科の独自質問となっており、問1～問10のみ公開されている。

アンケート項目は以下の通りである。

<学部>

1. この授業を履修した理由を教えてください。（複数回答可）
2. あなたはこの授業にどの程度出席しましたか。
3. あなたはこの授業に積極的に取り組みましたか。
4. <自由記述>あなたがこの授業に積極的に取り組んだ（あるいは、取り組まなかった）理由は何ですか。
5. この授業の内容に興味が持てましたか。
6. この授業の内容は理解できましたか。

7. この授業の教え方は熱意が感じられるものでしたか。
8. この授業の教え方はわかりやすく工夫されていきましたか。
9. <自由記述>この授業の教え方（シラバス、使用教材、学生の参加等も含む）に関し、あなたがよいと思う点、改善を要すると思う点を具体的に挙げてください。
10. この授業は総合的に見て満足できるものでしたか。

<大学院>

1. あなたはこの授業に積極的に取り組みましたか。
2. <自由記述>あなたがこの授業に積極的に取り組んだ（あるいは、取り組まなかった）理由は何ですか。
3. この授業の内容に興味が持てましたか。
4. この授業の内容は理解できましたか。
5. この授業の教え方は熱意が感じられるものでしたか。
6. この授業の内容は、高度職業人を目指すキャリア形成にとって意義が認められますか。
7. この授業で履修の専門分野に関する有用な知識が得られましたか。
8. この授業の教え方はわかりやすく工夫されていきましたか。
9. <自由記述>この授業の教え方（学生への対応、使用教材等も含む）に関し、あなたがよいと思う点、改善を要すると思う点を具体的に挙げてください。
10. この授業は総合的に見て満足できるものでしたか。

なお、公表されている「学生による授業評価アンケート」の実施授業数および満足度の推移のグラフを掲げておく（図2）。

(1) シンポジウム、ワークショップ等の開催

FD推進センターでは、さまざまなシンポジウムやワークショップなどのイベントを開催している。これまでに開催されたイベントは次の通りである。

① 第1回FDシンポジウム（2005年11月26日（土））

<テーマ> 「ゆとり教育」世代の大学入学を考える——大学は何をなすべきか

<内容> 第1部：基調講演・報告 第2部：パネルディスカッション

② FD推進センター主催ワークショップ（2006年3月6日（月））

<テーマ> 教育テクノロジーと授業改善

<内容> 講演とワークショップ

③ 第2回FDシンポジウム（2006年3月7日（火））

<テーマ> 学びの多様化と教育テクノロジーの効用

<内容> 第1部：基調講演 第2部：パネルディスカッション

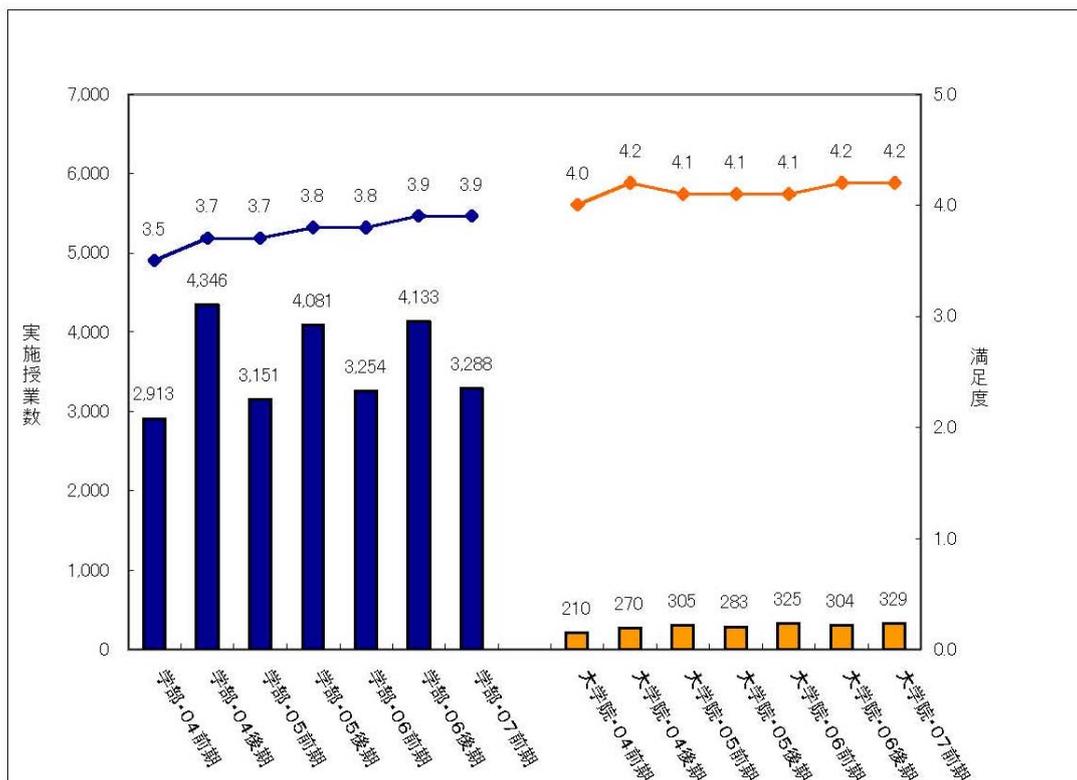


図2 「学生による授業評価アンケート」の実施授業数および満足度の推移

④ 第3回FDシンポジウム (2006年10月7日 (土))

<テーマ> 大学の理数教育を立て直す——基礎学力と学習意欲の向上をめざして

<内容> 第1部：報告 第2部：パネルディスカッション

⑤ 第4回FDシンポジウム (2006年11月18日 (土))

<テーマ> 大学教育に役立つ評価——GPA、授業評価の活用法とその実践

<内容> 第1部：発表 第2部：パネルディスカッション

⑥ 2007年度第1回FDワークショップ (2007年7月20日 (金))

<テーマ> 初年次教育の授業運営について——教育目標とそれを達成する方法論

<内容> ワークショップと報告

⑦ 2007年度第1回FDフォーラム (2007年10月6日 (土))

<テーマ> 法政大学FDの現状と課題を考える

<内容> FD推進センターおよび各学部からの報告等

⑧ 第5回FDシンポジウム (2006年12月1日 (土))

<テーマ> 大学図書館と学習支援サービスの展開

<内容> 第1部：基調報告 第2部：学生からの調査報告

(3) FDニューズレターの発行

F D推進センターでは、F Dニューズレターを随時発行している。

なお、F D推進センターのWebページによれば、2004年5月号としてVol. 1が、2004年10月号としてVol. 2が刊行されているものの、Vol. 3は発刊されておらず、その後は主として「学生による授業評価アンケート」の全学集計結果がニューズレターとなっているようである。2008年3月現在、2007年度前期の「学生による授業評価アンケート」全学集計結果報告が公表されている。

(4) 「特色あるF Dへの取組」助成金

2005年度より、学部、研究科、専攻等、教員グループとして種々のレベルにおけるF D活動の支援を目的として、「特色あるF Dへの取組」助成金を設け、対象となる取組を募集している。ここではF Dを「授業内容・方法を改善、向上するための組織的な取組」と定義し、その成果を法政大学全体の共有財産として活用でき、法政大学の教育全体を質的に向上させられること、という条件を設けた。そして、対象となった取組には、その成果を年度終了後半年以内に学内に公開することとした。

初年度の2005年度には16件の応募があったが、採択されたのは3件だけであった。2年目の2006年度の実績は6件、2007年度は2件にとどまった。応募が減った理由としては、初年度の採択率が低かったことのほかに、文系学部においてはF D活動にお金がかからないこと、また個人レベルの取組が多いことなどが考えられた。

(5) サンフランシスコ州立大学教育テクノロジー・ワークショップへの参加

F D推進センターの取組「F D活動と教育テクノロジーの高度な融合」（担当者：後藤篤子F D推進センター長・文学部教授）が、平成17年度の文部科学省「大学教育の国際化推進プログラム（海外先進教育実践支援）」に採択された。

それを受け、2005年10月と2006年1月の2回にわたり、関係教職員がサンフランシスコ州立大学教育学部教授技術学科（San Francisco State University, College of Education, Department of Instructional Technology）主催の教育テクノロジーに関するワークショップ（コーディネーター：キム・フォアマン教授）に参加した。

(6) 『法政大学F Dハンドブック』の刊行

2007年3月、F D推進センター編集・発行による『法政大学F Dハンドブック』が刊行された。体裁は、A 5版84ページからなる。

その内容は、「基本編」、「実践編」およびその他の項目からなっている。

まず、「基本編」では、教員が授業を進める上で押さえるべき12の事項が、原則として2ページで簡潔に述べられている。ちなみに、その12項目とは、「授業デザイン：到達目標の設定」「シラバスは学生との契約書」「様々な授業形態」「授業の進め方：90分間の授業の流れ」「教科書」「プリント」「様々なツール」「レポート」「試験と成績

評価について」「学生による授業評価アンケート」「オフィスアワー」「教室に留学生がいる場合」である。

次に、「応用編」で取り上げられているのは、実際に法政大学で優れた授業を展開している教員の事例が、担当者本人によってやはり2ページで紹介されている。以下に、「応用編」の目次からいくつかの事例を抜粋する。

- *ゼミ：入門ゼミ……ゼミの工夫について
- *大教室：コラボレーションの試み……財政学の場合
- *大教室：教室マネジメント……受講生から質問とコメントを回収
- *講義：文章論……学生の励みになる文章添削
- *講義：心理学……学生との相互行為（interaction）をもたらす「授業通信」
- *講義：建築史……A3一枚のプリントから広げる授業
- *語学：eラーニング……教育学習とeラーニングを組み合わせたブレンド型学習
- *フィールドワーク……主体的な学習への動機づけとしてのフィールドスタディとは
- *授業外への対応：心理学……学生の授業・生活上の相談事について
- *留学生：異文化適応と言語教育……学生の素晴らしい視点を発見する

さらに、「TOPICS」として「GPA」「JABEE（日本技術者教育認定機構）とは何か」が、さらに巻末には「文献目録」が掲載されている。

なお、このハンドブックについては内容のすべてがWeb上で公開されている。

（7）初年次教育モデル授業

FD推進センター「学習・教育支援プロジェクト」の活動の一環として、大学1年生を対象とした初年次教育のモデル授業をWeb上にて公開している。

公開されているのは、文学部心理学科を対象とした「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」である。この授業は、導入教育を目的とした前期2単位、後期2単位の Semester 科目であるが、必修科目ではない。1クラスの受講生は30数名である。授業者は、文学部心理学科の藤田哲也准教授である。

モデル授業は授業担当者に連絡してIDおよびパスワードを取得することで視聴できるようになっている。また、各回の授業について、「授業案（指導案）」「見どころ場面」「授業全体の流れ」「学生への配付プリント」「授業通信」が掲載されている。

なお、Webでのモデル授業公開の背景には、学内ネットワークが整備され、教育支援に関する様々なツールの利用が可能になったこと、また、ITを教育に活用する教員に対するサポート体制が充実してきたことが存在する。具体的には、法政大学情報メディア教育研究センターが技術面での支援を行っている。

4 考 察

法政大学のFD活動について調べれば調べるほど、その充実ぶりに感嘆せざるを得ないというのが正直な感想である。具体的に、法政大学におけるFD活動の特徴は以下の3点に集約されるように思われる。

第1に、FD活動の推進母体としてFD推進センターを設置していることである。多くの大学においては、FD活動の母体として位置づけられているのはせいぜい委員会組織ではないかと思われる。しかし、法政大学においては、教員こそ兼任であるとはいえ、3人の専任職員を抱えるセンターが学内組織として位置づけられているのである。この意味は、FD活動を推進する上で計り知れないほど大きいと言えるだろう。

第2に、組織的な位置づけがしっかりしている結果として、当然のことながらさまざまな活動が可能となることである。FD推進センターは5つのプロジェクトを有し、それぞれのプロジェクトが有機的に関連しながら、前述したような実に多彩な活動を行っている。

言ってみれば、FDに関してだけで5つもの実働部隊が存在しているのである。

第3に、徹底した情報公開である。シンポジウム等のイベントの報告、「学生による授業評価アンケート」の全学集計結果はもとより、『FDハンドブック』の全文、さらには初年次教育のモデル授業までもがWeb上に公開されていることには驚きを禁じ得ない。

このように、法政大学においては、おそらく全国の大学の中でももっとも充実し、かつ質の高いFD活動が行われていると言って過言ではあるまい。FD活動については緒に就いたばかりである本学が法政大学から学ぶべきことは、あまりにも多い。

<参考文献および資料>

*法政大学FD推進センターホームページ<<http://www.hosei.ac.jp/fd/>>

*法政大学ホームページ<<http://www.hosei.ac.jp/>>

*大沢暁(2007)「法政大学におけるFDへの取組」『大学と学生 第43号』pp. 38-47.

なお、法政大学FD推進センター事務局には貴重な資料をご提供いただきました。記して感謝申し上げます。